

令和 6 年度
津和野町架け橋期のカリキュラム開発に係る
効果検証業務委託報告書



令和 7 年 3 月

研究代表者 門田理世
(西南学院大学大学院)

目次

1. 調査研究組織・・・・・・・・・・・・・・・・	1
2. 研究報告	
(1) 令和6年度 活動報告・・・・・・・・	2
(2) 令和6年度 調査結果の報告・・・・・・・・	4
【助言】開発会議・共同実践打ち合わせ	
【助言】共同実践・振り返り	
【研修の実施】指導案研修・教職員研修会	
3. まとめと今後の課題・・・・・・・・	10

1. 調査研究組織

プロジェクトリーダー 門田 理世（西南学院大学大学院）

研究助言者

・プロジェクトコーディネーター 増田 吹子（西南学院大学大学院生・尚絅大学）

研究助言者

岩渕 善道
（西南学院大学大学院生・社会福祉法人一光福祉会）

研究助言者

高橋 一夫（神戸親和大学）

事務局

小森田 展子

2. 研究報告

(1) 令和6年度 活動報告

日程		内容	形態
2024 年	5月2日(木)	第1回開発会議 (日原)	オンライン
	5月17日(金)	第1回共同実践打ち合わせ (日原)	オンライン
	5月27日(月)	第1回共同実践・振り返り会議 (日原)	対面
	6月24日 (月)	教職員研修会打ち合わせ	オンライン
	7月1日(月)	第2回開発会議 (日原)	オンライン
	7月10日(水)	第2回共同実践打ち合わせ (日原)	オンライン
	7月17日(水)	第2回共同実践・振り返り会議	オンライン
	7月23日(火)	指導案研修	オンライン
	7月31日(水)	保小接続に関する教職員研修会	対面
	10月10日(木)	第3回開発会議 (日原)	オンライン
	10月21日(月)	教育委員会との打ち合わせ (日原地域以外の取り組みについて)	オンライン
	10月22日(火)	第3回共同実践打ち合わせ (日原)	オンライン
	10月29日(火)	第3回共同実践・振り返り会議 (日原)	対面
	10月31日 (木)	開発会議 (津和野)	対面
	11月27日(水)	共同実践打ち合わせ (津和野)	オンライン
	12月3日(火)	報告書について教育委員会と打ち合わせ	オンライン
	12月27日(月)	架け橋事務局座談会	オンライン
2025 年	2月7日 (金)	開発会議 (津和野)	オンライン
	2月10日(月)	幼保小の架け橋プログラムに関する調査研究事業における成果報告会	オンライン
	2月18日(火)	第4回共同実践打ち合わせ (日原)	オンライン
	2月20日(木)	共同実践・振り返り会議 (津和野)	対面
	3月6日(木)	架け橋プログラムについての意見交換会	対面

(2) 令和6年度 調査結果の報告

【助言】 開発会議・共同実践打ち合わせ

<日原地区>

会 場：津和野町立日原小学校

参 加 者：日原小学校、青原保育園、うしのしっぽ、日原保育園、
津和野町教育委員会、津和野町健康福祉課

調査研究組織：門田理世、増田吹子、岩渕善道、高橋一夫

〔会議・打ち合わせ概要〕

日原地区のカリキュラム開発会議、および共同実践の打ち合わせについては、「(1) 令和6年度活動報告」に示した通り、それぞれ4回について調査研究組織の4名が適宜参加した。

それぞれの会議・打ち合わせにおいては、令和5年度の共同実践と振り返りから得られた知見をもとに、小学校教諭と保育者の目線合わせが進み、子どもへの言葉がけなどに対して共通理解が深まったと指摘できる。

〔助言と評価〕

特に、第1回目の会議から、持続可能なカリキュラムを開発することを念頭に置き、実践が自走されることについても考慮する意見が出された。これは、助言者チームが、常に津和野町の目指すカリキュラムの方向性について整理し、参加者の共通理解を深めることができるように助言をした結果だといえる。

共同実践の打ち合わせについても、小学校側と保育園側のコミュニケーションが円滑にできており、話し合われる内容についても会議・打ち合わせを重ねるごとに具体的な事柄を押さえることができるようになっており、共同実践の準備が円滑におこなわれるようになったと評価できる。

また、第1回開発会議の冒頭で小学校・保育所それぞれの今年度の取り組みについて確認した際に、小学校教諭から「保育園でしていたことを基に小学校ですることが大事」という発言があった。これは、昨年までの取り組みの結果、日原地区では小学校と保育所での学びの継続性を考える姿勢が生まれている証左であるといえる。

<津和野地区>

会 場：津和野町立津和野小学校
参 加 者：津和野小学校、直地保育園、津和野幼花園、
津和野町教育委員会、津和野町健康福祉課
調査研究組織：門田理世、増田吹子、岩渕善道、高橋一夫

〔会議・打ち合わせ概要〕

日原地区のカリキュラム開発会議、および共同実践の打ち合わせについては、「(1) 令和6年度活動報告」に示した通り、それぞれ2回について調査研究組織の4名が適宜参加した。

津和野地区においては、日原地区の初年度と同様に、まずは小学校教諭と保育者の目線合わせが必要であった。

〔助言と評価〕

特に、10月31日の開発会議においては、小学校側の疑問や懸念について、プロジェクトリーダーの門田理世が丁寧に聴き取り、架け橋事業の重要性について説明をおこなった。その結果、津和野地区においても小学校側と保育現場側で共に前向きに共同実践に取り組む姿勢を作ることができた。

共同実践の打ち合わせについては、日原地区での実践の知見を活かすことができたため、小学校側と保育現場側が目指す子ども像を共有することができた。そのため、具体的な共同実践の内容についても、津和野地区の子ども達に適した案を構築できたと評価ができる。

2月7日の第3回共同実践の打ち合わせでは、研究助言者の増田が「大人が考えた共同実践の目的を子ども達と共有すること」を提案したことで、先回りしすぎず子どもの主体性を尊重するという大人のあり方が確認された。津和野町では架け橋期のカリキュラムとして「大人のカリキュラム」も作成している。子どもを主体として大人は見守るというあり方は、日原地区では昨年までの取り組みの中で定着してきたといえるが、日原地区以外においては引き続き時宜を得ての確認が必要と考えられる。

【助言】 共同実践・振り返り

<日原地区>

会 場：津和野町立日原小学校
参 加 者：日原小学校、青原保育園、うしのしっぽ、日原保育園、
津和野町教育委員会、津和野町健康福祉課
調査研究組織：門田理世、増田吹子、岩渕善道

〔実践概要および助言と評価〕

5月27日に行われた第1回の実践は、保小それぞれの児童が「この集団で活動することが楽しい」という思いとともに、お互いに安心できる関係性を醸成するという目的で行われた。実践内容は、春を感じる事物が描かれたビンゴシートを保小混合グループごとに検索し、その後、自分にとって「春」だと思うものをスケッチにして、新たにビンゴ上の紙に貼り付けるものだった。

「春を見つける」というテーマについて、1年生は既に生活科の中で取り組んだ経験があったのに対し、年長児にとっては初の取り組みであることに加え抽象的な概念であることから、春を見つけるとはどんな意味か理解できていなかった。プロジェクトリーダーの門田理世は、実践の協議において「何を行うか」だけに注目するのではなく、「春という概念が子どもたちに降りているか」など、現在の子どもたちの様子や発達についての協議の必要性を指摘した。その際、今はまだでも時期がくれば育ってくるだろう、と長い目で子どもの発達を見る観点は、保小の協議でも意識されるべき幼児教育の優れた点であることが説明され、今後のふりかえりの方針となった。

今回の大人主導の企画に、ある子どもが「こんなのは遊びじゃない」と言った。振り返りではこの言葉を重く取り上げ、次回以降の企画には頻繁に言及されることとなる。津和野において、子どもの声からカリキュラムを作る取り組みの一つと言える。

7月17日に行われた第2回の実践は、好奇心あふれる環境づくりを目的に「夏」というテーマで遊びを行った。前回の振り返りを踏まえ、今回は子どもに何をやりたいかを聞き、子どもが自分で遊びを発見することが意識された。振り返りでは、小学校は整備された環境を子どもたちに教えていくのに対して、保育は子どもが環境に働きかけ、そこから必要なものを整備していくという順番の違いが焦点となっていた。研究助言者の増田からは、保小の子ども同士があまり交流していなかったという意見に対して、7月の時期に保小の交流にねらいを持つことが適切かについては今後協議があってもよいのではと提案する一方で、今回の事業が小学校の先生が保育園での保育を知り、保育園の先生が小学校の教育を知る機会となっているという価値を示した。

10月29日に行われた第3回の実践では、子どもたちが環境を見つけに行きつつも、子ど

もたち同士も交流してほしいという思いから、体育館の倉庫にある遊具を自由に用いて好きな遊びを子どもたちで決めて遊ぶ交流が企画された。当日、子どもたちは最初は思い思いに道具で遊んでいたが、途中で一度集まって皆で何をしたいか話し合い、鬼ごっこなどの集団あそびを行った。交流終了予定時刻が来た後、ある年長児がまだ遊びたいと言ったため、時間を延長した後散会した。

振り返りでは、研究助言者の増田より津和野が目指す「探求」へは未だ途中でありながらも、大人の見線合わせが充実してきたことから、7月の事業よりもさらに架け橋事業としての進歩が見られたことが語られた。研究助言者の岩渕からは、最後に帰りたくないと言い続けた年長児への対応について、「自分が受け入れられる経験をしないと他人を受け入れることは難しい」とうしのしっぽの斎藤園長がお話されていたことを取り上げ、子どもへの関わりの意図を話し合うことが重要であることを示した。

<津和野地区>

会 場：津和野町立津和野小学校

参 加 者：津和野小学校、直地保育園、津和野幼花園、畑迫保育園

津和野町教育委員会、津和野町健康福祉課

調査研究組織：門田理世・岩渕善道

〔実践概要および助言と評価〕

2024年10月31日に開催された津和野地区における架け橋会議では、まず最初に「日原小学校区での雰囲気は羨ましかった」「私たちのところに、なぜ、外部の講師が来ないのか。と不満に思っていた」という声が聞かれた。その意見を踏まえ、この日の司会進行は外部講師が引き受けた。そこで、まず、思ったことを言っても大丈夫という雰囲気づくりのため、「架け橋事業とはいったい何なのか？思ったことを発言し合う」という根本的なテーマでの話し合いが最初に行われた。自己紹介をしながら「小学校への接続期を子どもや家庭の視点から円滑にサポートすること」と回答する先生方が多い中、一人、「お上（国・行政）がしろと言っていること」と発言する参加者がいた。その声につけとばかり「自分たちはこれまでもやってきているがその何がいけないのか」「何をどこからどう始めたらいいのか」「小学校の敷居が高い」「各保育所での育ちをすべて把握するのは不可能」といった保育所・小学校の双方が持つ不満や不安が吐露された。誰に対する声なのか。各自がそのことを確認する時間を通して、この架け橋期に取り組む当事者同士が「だからこそ、この架け橋期にすべきことは何なのか」を共有し合い、「それが何を子ども達、その家族、そして私たち教職員にもたらすのか」を共通理解していこうと仲間意識を育てていく雰囲気づくりが安心を生み出していることが読み取れる協議会であった。

2025 年 2 月 20 日に行われた津和野地区での共同実践では、前半は体育館で小学生が歓迎の言葉を述べた後、ボールを使った交流ゲームを行い、後半はグループごとに校舎探検を行った。1 年生は年長児に寄り添い、ボールを渡したり、ルールとは違う部分にもあえて指摘せず見守る姿が見られた。引率の先生もまた、要求、雑談問わず子どもたちの話をよく聞き、やわらかに誘いかけをしていた。

振り返りでは、学校使用のルールが焦点となった。体育館のはしごに登ってはいけないことや 3 年生が食べるエリアに入ってはいけないことなど、学校で決められたルールに関して、周りの先生はもっと毅然とした対応を取るべきという意見が上がった。研究助言者の岩渕からは、ルールが上から降りてくるだけでは自分たちが社会に関与する意識が薄くなってしまふ恐れがあることを指摘し、小さい頃から安心と挑戦を繰り返し、ルールが自分たちの遊びや生活に重要であることが腹落ちすることが重要であるとコメントした。

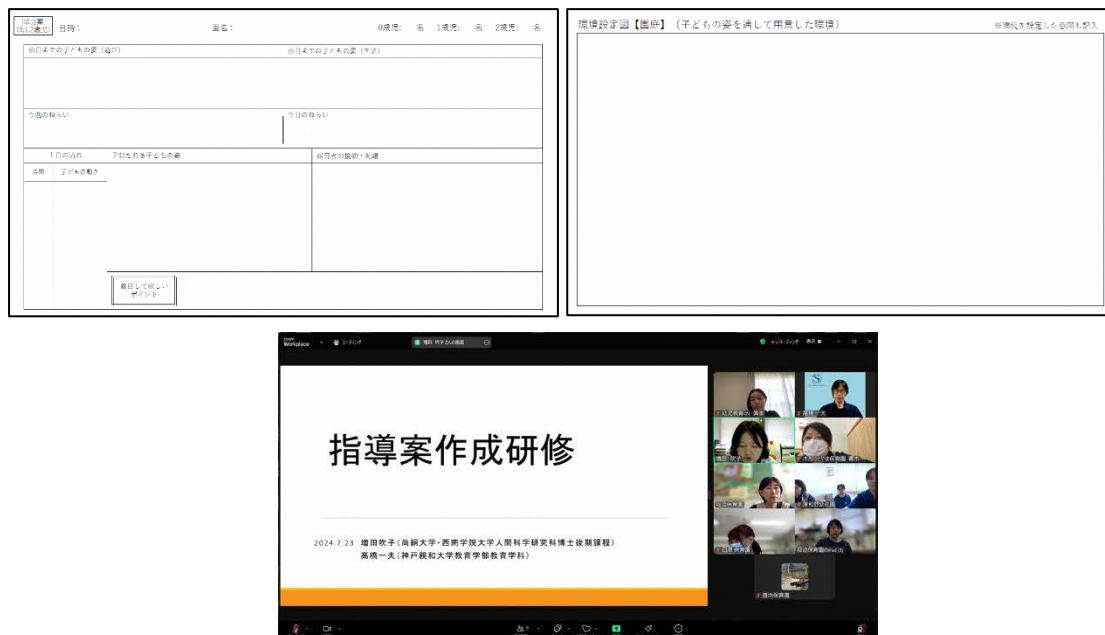
【研修の実施】指導案研修・教職員研修会

指導案研修

会 場：オンライン

参 加 者：木部さとやま保育園、直地保育園、津和野幼花園、日原保育園、畑迫保育園
津和野町健康福祉課

調査研究組織：増田吹子、高橋一夫



図．使用した指導案のテンプレートとオンライン研修の様子

この研修の翌週に予定されていた教職員研修で、保育現場での子ども達の様子や保育の実際を知るために小学校教諭が保育所で半日程度過ごすことになっていた。これは公開保育のような形になるため、保育所の先生方は指導案の作成が求められることとなり、指導案の考え方についての研修を実施することになった。

事前に環境構成図を含めた指導案の提出を求めたところ、子どもの興味関心を基に生活の流れを考えたり、子どもが環境にどう関わるかを詳細に記述したりしているものがあった一方で、「子どもの姿」に基づいた「ねらい」「内容」を考えられていないものや、子どもの「できない姿」に着目しているものなども散見された。そこで、研修前に増田と高橋の2名で研修のポイントや内容について検討し、研修の目的を①「子どもの姿があって、ねらいがあって、内容がある」ことへの理解、②ねらいを達成するための配慮や援助、環境構成を考える、③子どもの姿＝子どもがしていることではなく「子どもが何を感じ、何を楽しみ、何に心を動かし、どう育っているか」を記述する、とした。当日は、事前に提出された指導案の中でポイントを押さえて書かれているものを適宜紹介しながら、指導案の項目の一つ一つの考え方と各項目の関連について説明し、自分が書いたものをその場で見直してもらうことを繰り返した。その中で、確認事項として、子どもの「できていないこと」に着目するのではなく、肯定的な表現をすることを伝えた。一つ一つの内容について、不適切な記述例と適切な記述例を示し、どう書けばよいのかということ具体的に理解できるように努めた。また、形として適切な指導案の作成ができるようになるのではなく、子どもの捉え方や保育の考え方を問い直す機会にしたてほしいと考え、ただ肯定的な表現ができるようになること

を求めるのではなく、子どもが何を経験しているかを見ようとし、その経験のもつ意味を考えようとすることや、子どもを肯定的に見ようとする意識を持つことを伝えるなどした。

研修中は、参加者がうなずきながら聞いていたり、こまめにメモを取ったりしている様子から、非常に熱心に取り組んでいることがオンライン上でも伝わってきた。この指導案研修後に教職員研修のために保育者が作成した日案を見ると、事前に提出された日案からより具体的に子どもの活動が理解できるように改善されており、特に園庭や保育室における環境構成は子どもの姿をとらえた保育者の意図が見えるものになっていた。そのため、指導案研修の中で私達が伝えたかったことがしっかりと伝わっているという手応えを感じた。また、後日インタビュー調査で津和野を訪れた際に、複数の園の先生方から、指導案の研修がとても良かったと言っていただくことができた。

事前に提出された日案では、記述が十分とは言えないものもあったが、研修後に作成されたものが格段に良くなっていたのは、元々津和野の保育者が温かい目で子ども達を見ており、子どもの主体性を大切にしていたからではないかと考える。以前から津和野の保育者の温かさや保育に真摯に向き合う姿を感じていたが、今回の指導案研修を通して、この津和野の保育者の姿勢がより明らかになったように感じている。

教職員研修会

会 場：津和野町立津和野小学校

参 加 者：全小学校、全保育園、津和野町教育委員会、津和野町健康福祉課

調査研究組織：門田理世、増田吹子、岩渕善道

〔実践概要および助言と評価〕

2024年7月31日に教育長出席のもと、津和野町全小学校、全保育所の教職員を対象とした架け橋期合同研修会を開催した。任意の研修であったため予定よりは少ない参加者数ではあったが、全体での講義→各グループに分散しての保育参観→全体での協議の流れで終日研究が実施された。まず、講義では「架け橋期の意義について」「保育観察の視点」等、についての話を聴いた後、質疑応答を経て、各グループに分かれて保育参観を行った。お昼休憩をはさんで、再び全体で集まり、「保育観察から見えた子どもの姿」「子どもの姿の中に見えた育ちのつながり」等について、グループごとの話し合いを行った後、各グループでの話し合い結果を全体で共有した。

「5歳児の遊びが複雑であったこと」「思った以上にしっかりと自分の意見を言うこと」など、小学校側からの感想に対して、「遊びを発展させていくために子ども達が行っている工夫」「子ども達が遊びを通して何を表現したかったのか」等、保育者側は子どもの声を拾って小学校側に解説をし、子ども理解の視座を共有することの重要性やそれを実施していく上での指導上の留意点などが話し合われた。

3. まとめと今後の課題

今年度は最終年度として、モデル地区の日原小学校区での研修に継続して参加しただけではなく、初めての全体研修や日原小学校区以外の地区での共同実践が実施された。特に、津和野小学校区での研修に外部助言者として参加したことで、架け橋期の初期段階で何を意識する必要があるのかが見えてきた。以下、今年度の研究調査から見えてきた架け橋事業を実施するにあたってのポイントを大きく3点挙げる。

(1) 理論・知識に対するフィードバック

参加者の多くは、この事業が意識的に実施される以前から保育者・教師としての経験を有しており、それぞれが接続期に関するイメージや理念を有している。その中にあって、現在、施行が進められている架け橋事業に関しては、様々な知見に基づく根拠の裏付け、また、実施による効果などがうたわれている。こうした事業の意義や効果、そして、実施にあたっての留意点などを定期的に研修を通して共有し、各保育者や教員の現状に応じたフィードバックをしていくことが、事業の継続性や実施の効果を向上させる可能性があることが今年度の調査を通して示唆された。例えば、「架け橋期の意義とは?」「子どもの育ちから教育を計画することのよさ」等、こうした根本的な保育教育への理解を深めていくことで保育所・小学校双方の実践への共感が生まれてくる土壌づくりが促進されることなどがあげられる。

(2) 子どもの育ちや保育者・教員の思いを語り合う場づくり（制度・雰囲気づくり）

「架け橋はしなければならないといわれたから」という当事者意識の芽生えない中でこの事業を始めることが、実際はほとんどのケースであるのかもしれないが、子どものことを互いに語り合い始めるとその思いは止まらず、様々な指導方法や指導上の留意点等、専門家としての視点が共有され始める。その語り合いの中で、互いの子どもの育ちへの思いや保育観・教育観が交差するところから「私の地区での接続期の在り方」が生まれることが、昨年までの日原地区、今年度の津和野地区の研修の履歴から明らかになってきた。まずは、何が課題であるのかを語り合うだけではなく、一枚の子どもや環境の写真から実践の意義を語り合うこと、その中で互いの保育・教育への価値観を認め合うことから始めたい。その風土を熟成させていくためには、語り合う場づくりを、まずは行政からの声掛けをきっかけにしていくことが必須である。

(3) 継続して実践を支えるサークル（コミュニティ）の可視化

この事業の最後の研修で、「来年度からが本当の事業開始であると考えている」という行政側からの発言が、津和野町におけるこの事業の意義や成果を端的に表している。3年間という時限付きの事業は単なるきっかけに過ぎず、これをいかに町の事業として根付かせていくのか。それこそがこの町の架け橋期にとっての課題であるという発言の上に、新たな課題を提示する必要はない。その上でこの課題に取り組むにあたっての助言として、敢えて、

町外の人々の声を時折取り入れることを提案したい。

津和野町が有する、地域・教育コーディネーター、保育コーディネーターに加えて、保育・教育を専門とする研究者との交流等、どの課題に対して、誰とどのように取り組むのかが組織化（コミュニティの存在）され、それが可視化されていくことで、似たような事象や課題に出くわした際に参考資料として利用することが可能となる。

担任が代わっても、担当者が代わっても、誰もが子ども達に向き合えるような仕組みづくりのためには、もう少し時間を要すると思われるが、それをもが継続への鍵であることを忘れずに取り組みを続けていきたい。

令和 6 年度

津和野町架け橋期のカリキュラム開発に係る効果検証業務委託報告書

発行日：令和 7 年 3 月 21 日

発行者：研究代表者 門田理世（西南学院大学大学院）